

< 研究報告 >

実習報告書のテキスト・マイニング解析に基づいた実習に対する 大学院生及び学部学生の取り組み姿勢の考察

福田 早苗・長見 まき子
Fukuda Sanae・Nagami Makiko

関西福祉科学大学健康福祉学部／関西福祉科学大学EAP研究所

要約

平成16年に設置された関西福祉科学大学EAP研究所はインターンシップや大学院生の実習の場として活用されている。また、今後は公認心理師の実習の場としても活用される可能性がある。従って実習がどうあるべきか、また学生・大学院生にどのような効果が得られているかについては更に研究が必要である。著者らはこれまでにEAP研究所で実習を行った学部学生、大学院生らが執筆した文書を解析し大学院生にとっては貴重な「臨床経験」、学部学生にとっては貴重な「支援の現場体験」となっているという結果を得た。その結果を言語学的に再考察し、特に動詞に着目し、大学院生・学部学生毎の学ぶ姿勢について考察したものである。

キーワード：EAP研究所、教育、実習、言語分析

I. はじめに

玉手山学園関西福祉科学大学EAP研究所（以下、EAP研究所と略）は平成16年4月に「あけぼの会」と共同で立ち上げられた我が国初のEAP研究所である。EAP研究所は、心の健康対応を主として企業勤労者を対象として「職域管理者および関係者に対する心身の健康に関する教育訓練および研修」を業務としている。一方で、EAP研究所では、平成18年度から関西福祉科学大学大学院社会福祉学研究科心理臨床学専攻（以下、臨床心理系と略）の大学院生が産業領域における心理臨床の場として実習を行っている。今後は公認心理師養成における実習生を受け入れていく可能性もある。平成18年度から毎年1-2名の大学院生が実習を行い、また、平成26年度からは関西福祉科学大学健康福祉学部健

康科学科の学部学生のインターンシップ生の受け入れが開始されている。このようにEAP研究所の教育の場としての活用は近年拡大している。EAP研究所での大学院生の臨床実習の位置づけは、これまでは臨床心理士になるための臨床心理系の学生が行う臨床実習であった。人数としては例年1-3人が通例で、数は少ないものの90時間以上の実習を通して、職場復帰を目指す社会人の対応やEAP活動のプロセスを学び、将来の臨床活動に役立つスキルを高めるものである（大野, 2007）。臨床心理士の中で、働く人たちの職場復帰や職場での健康活動の普及にかかわる者は、病院臨床や学校臨床におけるよりも少なく（大野, 2007）、産業臨床について学べる場も日本にはあまり多いとはいえない。現在の日本の労働環境は数々の労働関係の法律改正にも関わらず改善されたとはいえない。近年スト

レスチェック制度も導入され、産業臨床現場での臨床心理士・公認心理師の養成は、社会的ニーズが高いものと考えられる。一方、EAP研究所でのインターンシップの位置づけは、上記とは大きく異なり、学科での学びを深めるためと社会体験を主としている(福田, 他, 2017)。こちらは人数としては1-2人であるが、期間は5日間と短く、臨床実習ではなく、プログラムの体験や観察・陪席といったことが主となる。

このように教育の場としても活用されているが、EAP研究所における実習等の教育効果についてはあまり検証されておらず、学部学生や大学院生にとってどのような実習が望ましいかについてはあまり検討されていない。また、公認心理師養成は各大学で始まったばかりであり、産業領域、特にEAP領域での実習は全国でも珍しく、今後の同様の実習に対する示唆も得られると考えられる。臨床心理士や公認心理師の実習はクライアントに一对一で対応する場合や、復職支援プログラムのような集団療法であっても、それほど多くない数のクライアントとの関係性によって実習が成立している。このような場合、量的な調査では、埋もれてしまう情報が多くあると考えられる。特に実習に挑む姿勢やモチベーションは一人一人の実習の目的によっても異なり、個別性が高いと考えられる。学部学生は現在インターンシップという形で参加しているが、将来的には学部の心理実習としてEAP研究所で実習する学生も出てくる可能性がある。公認心理師養成といえども、学部学生の実習と大学院生の実習は明らかに位置づけが異なるので、スタッフのかかわりや実習の評価をどうするか等、課題も多い。また、実習前にどのような教育をすることが適当であるかなどについても議論が必要である。テキスト・マイニング手法を用いた質的解析は、少数例の記述から実態を明らかにすることに

適した手段であると考えられる。

テキスト・マイニング法は、コンピュータによってデータの中から自動的に言葉を取り出し、さまざまな統計的手法を用いた探索的な分析を行うもので(樋口, 2014)、質的データの中でも特に文章型のデータを分析することができ、テキスト・マイニング手法は、インターンシップ、薬学、理学療法、教育実習、社会福祉士の実習等、幅広い分野の実習の分析に用いられている。(向井 他, 2014, 片瀬 他, 2015, 二宮 他, 2018, 渡邊 他, 2018, 大瀧 他, 2010)。特に看護実習の関連報告は数多い。臨床心理実習での研究報告としては、評価指標を作成する目的で本分析を用いた報告(古田, 2016)等がある。また、社会福祉士養成では、スーパービジョンの在り方についても同じ分析を用いて報告されている(渡邊 他, 2018)。著者らは、これまでにEAP研究所で実習を行った学部学生、大学院生らが執筆した文書を解析し、大学院生にとってはEAP研究所は「臨床経験」となっており、学部学生にとっては「支援の現場体験」となっているという結果を得ている(福田, 長見 2017)。

本稿では、EAP研究所の教育の場としての効果検証を大学院生・学部学生の実習報告のテキスト・マイニング手法による分析結果を言語学的に再考察し、特に、動詞に着目し、大学院生と学部学生で実習に臨む姿勢についてどう異なるかについても考察したので報告する。

Ⅱ. 方法

先行研究と同様に(福田, 長見, 2017)、平成18年度から平成27年度までのEAP研究所紀要に掲載された大学院生の実習報告及び平成27年度の学部3回生の実習(インターンシップ)報告を題材とした。これらの著作権があるEAP研究所紀要から分析の許可を得

た。EAP研究所紀要に掲載された実習報告それぞれをKHcoder（樋口，2014）を用いてテキスト・マイニングを行った。分析は全てKHcoder（樋口2014）を用いて実施し、その結果に言語学的な考察を加えた。また、動詞に関しては大学院生・学部学生毎にどう関連しているかの共起ネットワークを再解析した。

Ⅲ. 結果

大学院生は合計20名、学部学生は3名の報告書の分析を行った。記述統計の結果、958種類の語が分析対象となり、平均出現回数は6.20回（標準偏差15.94）であった。1回だけしか出現していない単語が409種類あり、全体の42.7%を占めた（福田，長見，2017）。表1に頻出語150語のうち動詞のみを示す。EAP研究所の実習報告で出現頻度が高い動詞は、「学ぶ」「行う」「感じる」「得る」「考える」「知る」「見る」「働く」「向ける」「思う」「深める」「聞き取る」「関わる」「持つ」「取り組む」「進める」「聞く」「出来る」「積む」であった。「学ぶ」「思う」「関わる」の名詞化した語句である「学び」「思い」「関わり」も頻出150語に入っていた。これらの中から「学ぶ」「知識を得る」など、学習にかかわると考えられる用語は「学ぶ」「（知識を）得る」「知る」である。また、学んだ結果から出た動詞として「感じる」「考える」「思う」「深める」「進める」であると考えられる。傾聴や観察と考えられる「見る」「聞き取る」「関わる」「聞く」「向ける」という動詞、対象者にかかわる動詞として「働く」という動詞が見られた。

表1. 頻出150語のうち動詞のみ

抽出語	出現回数
学ぶ	117
行う	91
感じる	73
得る	62
考える	39
知る	29
見る	18
働く	18
向ける	16
思う	13
深める	12
聞き取る	12
関わる	11
持つ	11
取り組む	11
進める	11
聞く	11
出来る	10
積む	9

次に、大学院生・学部学生に分けて、関連する動詞を解析した。結果を図1に示す。大学院生・学部学生共通の動詞として「得る」「感じる」「思う」「深める」「持つ」「整える」「活かす」「話し合う」「過ごす」「聞き取る」「学ぶ」「考える」「振り返る」「行う」「知る」「見る」「楽しむ」「向ける」「聞く」であり、学部学生のみに関連する動詞は「分かる」「話す」「出す」「目指す」「気づく」「用いる」「努める」「伝える」「与える」「限る」「取り入れる」「置く」「違う」であり、大学院生のみ関連する動詞は「関わる」「働く」「取り組む」「重ねる」「進める」「出る」「積む」「受ける」「教える」であった。

IV. 考察

EAP研究所において心理臨床実習を行った大学院生、インターンシップを行った学部学生それぞれの報告書のデータ・マイニング法を用いたデータの再解析を実施した。その結果、大学院生・学部学生が共通する動詞と

しては「学び」に関する動詞と学んだ結果から出たと考えられる動詞、傾聴に関わると考えられる動詞の一部で共通性が認められた。一方で両者で異なる動詞として、学部学生では気づきや理解に関する動詞や今後の目指す方向性やここでの内容を取り入れるといった動詞が出る一方で、大学院生は、より積極的

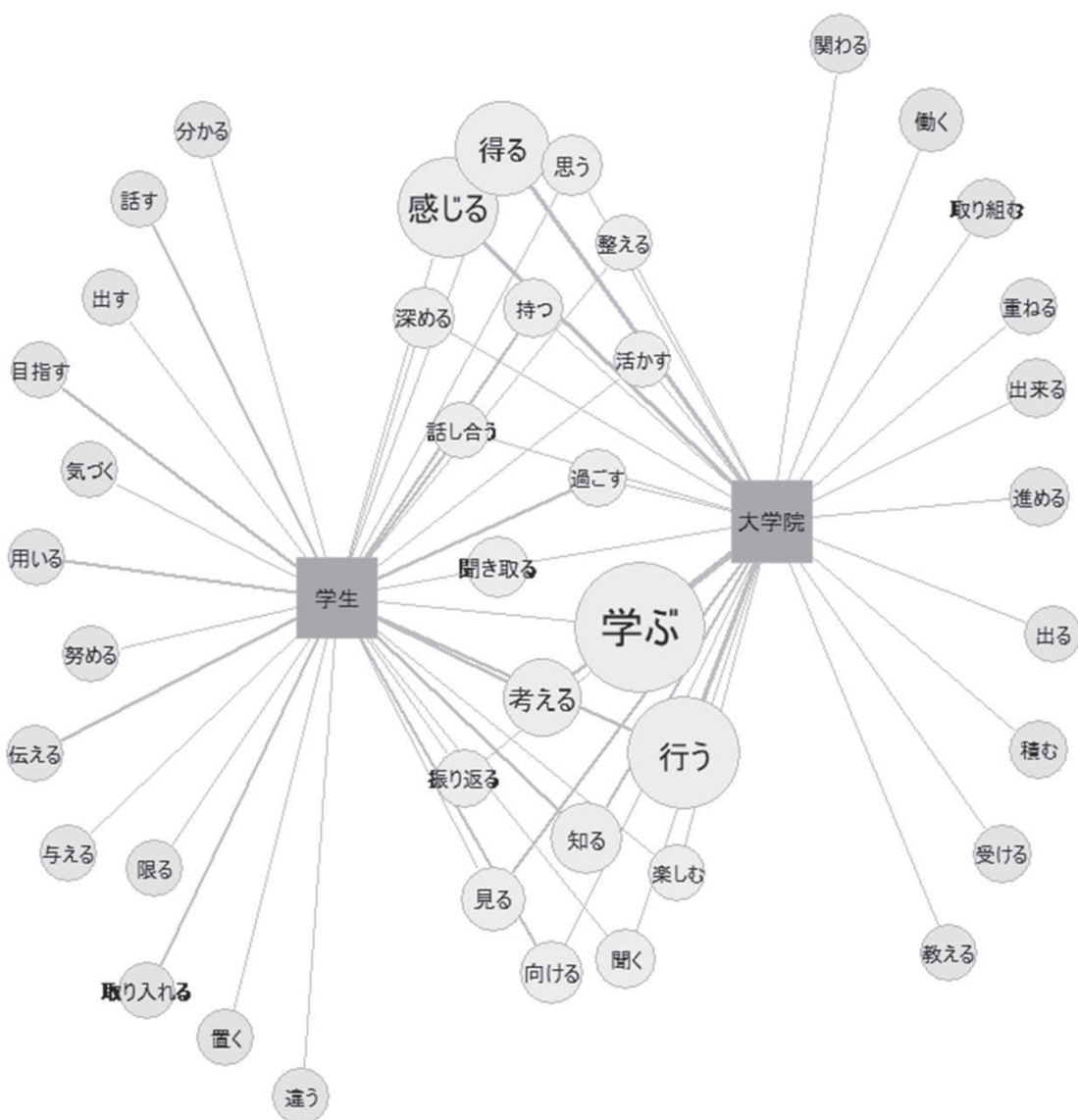


図1. 関連のある動詞の分析

に実習に取り組み、自分自身の将来につなげていこうという姿勢が現れていると考えられる動詞が関連していた。

この結果から考えられることは第一に学ぶということは両者に共通しているが、学ぶ目的そして、それが将来につながるかどうか大きな違いである可能性があること、第二に学部学生の実習であっても傾聴のスキルは必須であるということである。大学院生は将来自分が臨床の現場で働くことを想定し、より積極的に対象者に関わろうという姿勢が現れていると考えられる。一方で学生はまだ目指す方向があいまいであり、実習から新たな視点や考えを気づき、それを自分の将来なりたい職業においてどう取り入れるとよいかを考えているといえよう。本研究で対象とした学部学生は、インターンシップとして参加しており公認心理師の実習としては参加していないし、心理関係の授業はあるものの心理学を主たる専攻としていない。この点は大きな違いであるので必ずしも参考にならないかもしれないが、学部学生が身に付けるべき視点や、動機付け、また将来の方向性を踏まえた事前事後指導が必要という点は参考にできるのではないかと考えられる。一方大学院生は、専門家の卵としての自覚を持ち、「実習だから」と甘く考えるのではなく、スタッフの一人であるぐらいの気構えが必要かもしれない。傾聴や心理テストのスキル、対象者の対応スキルは当然持っているものとして扱われることはもとより、実習から何を学ぶべきかという視点が学部学生のそれとは大きく異なることは注視すべきであろう。心理実習での先行研究例は多くはないが、他の資格に関連する実習において、例えば学生の実習への満足度との関連が検討された報告や（大瀧・他、2010）、実習の時期によって異なるという報告（向井・他、2014）等が見られ、心理実習でも同様の分析をしていく必要があると考え

られる。

今後は、本人同意等をもって日誌の分析や指導内容等についても分析を進めることで、こういった視点を持って実習をしているか等の実習生の対象者とのかわり方、指導者の方が求める実習生に身に付けさせたいスキルや視点はどのようなものか、そのためにどのような事前事後指導を実施すべきなのか、逆に受け入れる施設側が実習生に求める態度やスキルはどのようなものか、等多角的な視点からの解析を実施し、行っている実習が想定している効果を発揮しているかについての検証を行う必要がある。

引用文献

- 1) 柳井勉. (2004). 関西福祉科学大学EAP研究所の沿革. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要, 1, 1-2.
- 2) 大野太郎. (2007). EAP研究所における大学院生実習活動. 関西福祉科学大学EAP研究所紀要第, 2, 75-76.
- 3) 福田早苗, 木村貴彦, 松村歌子, 長見まき子, 山内彰. (2017) K大学H学科におけるインターンシップ導入の意義と課題 文献的考察を含めて. 総合福祉科学会誌8,
<http://id.nii.ac.jp/1059/00002040/>
- 4) 樋口耕一. (2014) 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して. ナカニシヤ出版.
- 5) 向井淳治, 徳山絵生, 木本美香, 宮武望, 小野原未由來, 本莊愛美, 濱田藍子, 高橋直継. (2014). テキスト・マイニングによる病院実務実習日誌の分析. 医療薬学, 40, 245-251.
- 6) 片瀬拓弥 (2015). インターンシップ自己評価表のテキスト・マイニング分析. 清泉女学院短期大学研究紀要, 34, 1-10.
- 7) 二宮省悟, 吉村修, 楠元正順, 吉田勇一,

- 田崎修一郎. (2019) 臨床実習指導者のアンケート調査におけるテキストマイニングを用いた客観的分析. 理学療法科学, 34, 205-209.
- 8) 渡邊隆文, 安保尚, 井坂優美, 土屋瑛梨香, 檜木博之, 初鹿野美穂, 和光勇介, 渡辺健市, 渡辺裕一. (2018) 相談援助実習における実習スーパービジョンの現状と今後の課題. 健康科学大学紀要, 14, 17-27.
- 9) 大瀧 ミドリ, 高橋 裕子, 吉澤 千夏, 今村 聡美. (2010) . テキスト・マイニングによる教育実習体験の分析. 東京家政大学研究紀要 人文社会科学, 50, 63-70. <http://id.nii.ac.jp/1653/00009280/>
- 10) 古田雅明, 中田香奈子, 栗田麻美. (2019) 精神科臨床心理実習における教育目標と実習生の学び実習記録のテキスト・マイニングから. 人間生活文化研究, 29, 791-798.
- 11) 福田早苗, 長見まき子. (2017) EAP研究所の教育及び研究の場としての活用—今後の展開含めて—関西福祉科学大学 EAP研究所紀要10, 23-28.